

渡部昇一著『繁栄の哲学』を貫いた巨人 松下幸之助 渡部昇一著作集／人生① ワック 2012年6月26日刊を読む

修行の時代

1. 講談はすぐれた教科書

- (1)この頃、松下少年は、しきりに講談本を読んだという。当時の講談本は勸善懲悪^{かんぜんちやうあく}で、作者の変な思い込みが入っておらず、善い者は善い、悪いやつは悪い、という非常に単純明快な筋であった。のちに松下さんは、すべて振り仮名つきの講談本を読んで漢字を覚えたと言っている。この発言は国語の問題を考える場合、大きな意味をもっている。
- (2)というのは普通、国語問題を考える人は学者なので、「書けなくてはだめだ」という考えがある。ところが、一般の人は書くことはそれほど多くないから、読めればよいという考えもある。松下さんのケースでみると、後年こそ著述や口述を頻繁にしたが、物書きではないから、差しあたり書くことよりどんどん読めればよい。そのときに一番厄介なのは、漢字が読めずに引っかかることである。日本では、江戸時代からすでに総ルビ（すべての漢字に振り仮名がついている）に近いのを木版で彫っていた。これは日本人の民度を高めるのに絶大な効果があったと思う。
- (3)われわれ旧制中学に学んだ者は漢文中心であったから、最近の本を読んでいて知らない単語というのにまずお目にかかることはない。しかし、幸田露伴などの本を読んで、振り仮名がふっていないのを見ると腹が立つ。もし知らぬ字があって、漢和字典を一字一字引いていったらいつまでたっても読めない。ところが振り仮名をふってあれば、意味は何となく通じるからすらすらと読めるものである。何度かそういうのにぶつかっているうちに、意味は何となく掴めてくる。それで、私は振り仮名主義なのである。私の経験からいっても、子供の頃は、ほとんどが少年講談を読んでいた。あの頃の講談本はみんな振り仮名つきであったから、『宮本武蔵』や『塚原ト伝^{ぼくでん}』などを何冊も読んでいるうちに知らない漢字がだんだんなくなっていく。意味も何となく通じるようになった。学校で新しく覚える漢字は一つもなかったと思う。聞いてみると、私の世代の者は大抵そうである。教科書で書き取りの練習こそしたが、読書力は振り仮名つきの講談本で養ったと思う。
- (4)これなど、今後の日本人の読書力を考慮して、出版社が真剣に考えるべきことだと思う。引っかかるのは読めない漢字があるからで、仮名さえふってあれば一気に読める。振り仮名が多いと、字面が汚いとか綺麗だとかいうのは、インテリの発想であると思う。

2. 漢字仮名交じり書きほど高能率なものはない

- (1)これは逆に言うと、言葉の二つの機能を、しばしば国語論者は混同しているということである。情報を送り出すほうが、難しい言葉は非能率と考えている。だから、戦後はなるべく漢字を減らし、振り仮名をなくそうというふう考えた。なるほど、送り出すほうは、漢字をたくさん使って振り仮名をふると、えらく時間がかかる。ところが、言語には送り出すほうだけではなくて、情報を受けるほうの機能というのもある。受け取るほうの機能から言うと、不便だと言われた日本語が一番能率がいい。一番読みにくいのは、誰にもわかるように、発音記号で書かれた英語などで、発音どおりに書いてあるからといっても、すらすらと読めるものではない

い。

- (2)電報が読みにくいことはみんなが体験している。以前は電報は全部片仮名だから、送り出す側は非常に易しかった。しかし、このように送り出すほう、すなわち発送を極端に易くすると、受け取るほうがかえって難しくなる。英語、フランス語、ドイツ語など、いずれもアルファベット二十数文字の組み合わせでできる。だから、発送が非常に易しい。これに対して日本人は劣等感を持ったのである。和文タイプを打つのにかなり時間がかかる。それで、仮名文字運動とかローマ字運動が生じた。発送の簡素化である。ところが、それは受け取る側の能率を忘れた送り出し方である。受け取る側から考えると、漢字仮名交じり、しかも難しい漢字にルビをふるといのは、一番受け取りの早い高能率の表記方法だと思う。ただ、送り出し方が遅かったものだから、それが日本語の欠点だとばかり思われてきたにすぎない。
- (3)世の中が進み、ワードプロセッサのようなものがでてくると、発送の簡単さにおいて外国語も日本語もあまり差がなくなってくる。受け取り側にとって、日本語はきわめて効率がいいから、外国と日本における教育速度あるいは伝達速度、情報速度は大きく開いていくだろうと私は思っている。
- (4)そういうことを考えるにつけ、もしも当時の本が、終戦直後のインテリが考えたように、仮名はふりませんというものばかりだったら、松下少年は自由に本を読みこなせなかったであろう。しかも講談本というものは、黒白がはっきりしているのも、若い人に向いている。講談社を起こした野間清治は、社名にみるように講談が好きで、その口述を活字にし、しかも漢字にはすべて仮名をふった。たしかにインテリから見ると、講談の教える倫理とか講談の筋などというのは、高級とは言い難く映るらしい。しかし、講談は歴史物語の原型みたいなもので、物語としては一番すっきりしている。そして、講談の主要なところは、義理人情と一言で言うが、人の心を読むことと、素朴なヒューマニズムを教えるところにある。全体主義を鼓吹するものではなく、必ず温かい人間関係、思いやり、義理人情を説く。なまじっかな本よりよほど内容があったと思う。
- (5)講談全集というものは、松下さんが少年の頃にはなかったと思うが、私が夢中になって読んだ頃は、青い絹貼り装丁の立派なものもあった。あれだけのポピュラーな物語が日本にあったかと思うと、むしろ誇りに思う。松下さんが読んだのは、整理される前のもっと幼稚な講談だと思うが、にもかかわらず、小学校を出たばかりの少年が読む本がいっぱいあったということは幸いだった。

P56 ~ 60

<コメント>

読解力を身に着けるには、「本格的な読書」が欠かせない。「本」に慣れ親しむ第一歩として、仮名は必要不可欠。仮名がふってなければ本を読み通すことが困難な場合には、まずは、仮名がたくさんふってある本で「読書」の習慣を身に着けたい。大切なことは、この松下幸之助のように読書の絶対量を大幅に増やすことだ。日本語をはじめて学ぶ方々、特に留学生にとって漢字は最大の取り組み課題。振り仮名がたくさんついた本を繰り返し読み、日本語の表現や漢字に親しむことも素晴らしい日本語学習法。小学生が1週間に何冊も本を読んで読書に親しんでいるように、日本語を学ぶ留学生の皆様も1週間に仮名がたくさんふってある本を何冊も読み、日本語に親しんで頂きたい。

— 2018年10月30日(火) 林明夫記 —